

## “The Perils of Certain English Prisoners”における抑圧された欲望

筒井 瑞貴

### はじめに

*A Christmas Carol* (1843)などで知られるような、Charles Dickens (1812-1870)の社会的弱者に対する共感の眼差しも、ひとたび外国や大英帝国の植民地に向けられると相貌を一変する。Brantlinger が“Dickens’s sympathy for the downtrodden poor at home is reversed abroad, translated into approval of imperial domination and even, if necessary, of the liquidation by genocide of “niggers” and “natives”” (207)と指摘し、Ackroyd も“In modern terminology Dickens was a “racist” of the most egregious kind” (572)と述べているように、すでにこの作家の人種差別的・帝国主義的傾向が明らかにされて久しい。1853 年に Dickens 自身が編集する雑誌 *Household Words* に発表されたエッセイ “The Noble Savage” を見ても、のっけから“I don’t care what he calls me. I call him a savage, and I call a savage a something highly desirable to be civilised off the face of the earth.” (“The Noble Savage” 105) と記しているように、Dickens は「未開人」を理想化したロマン主義的思考を一笑に付し、彼らの道徳的感情の一切を否定している。1857 年のインド大反乱に際しては友人の Angela Burdett-Coutts に宛てた有名な手紙で次のように綴っている。

And I wish I were Commander in Chief in India. The first thing I would do to strike that Oriental race with amazement (not in the least regarding them as if they lived in the Strand, London, or at Camden Town), should be to proclaim to them, in their language, that I considered my holding that appointment by the leave of God, to mean that I should do my utmost to exterminate the Race upon whom the stain of the late cruelties rested; and that I begged them to do me the favour to observe that I was there for that purpose and no other, and was now proceeding, with all convenient dispatch and merciful swiftness of execution, to blot it out of mankind and raze it off the face of the Earth. (*Letters* 459, 下線部は筆者による)

Alex Tickell も言う通り、この手紙の内容は必ずしも額面通りに受け取るべきではないだろうが、<sup>1</sup> “exterminate”や“raze it off the face of the earth”といった言い回しや主張の一部

は“The Noble Savage”をはじめとする他の作品にも見られるものであり、Dickens の「他者」に対する共感の限界を示すものであるというのもまた事実であろう。

こうした Dickens の人種観がもっとも直接的な形で投影されているのが *Household Words* の 1857 年のクリスマス特集号に掲載された Wilkie Collins との合作小説 “The Perils of Certain English Prisoners”である。作品ではジョージ三世の治世下のカリブ海の Silver-Store という架空の島を舞台に、原住民の裏切りと海賊の襲撃によるイギリス植民地の「危機」が描かれる。Dickens が担当した第一章の“The Island of Silver-Store”では、語り手である主人公の英国海兵隊の兵卒 Gill Davis や、彼が密かに思いを寄せる女性 Marion から植民地で暮らすイギリス人たちが、混血の原住民 Christian George King の裏切りと海賊の襲撃によって捕虜にされるまでが描かれる。続く“The Prison in the Woods”は Collins の手による章で、奥地の森のなかに幽閉された一行が密かに筏を作り、海賊たちが眠っている隙に脱出するまでが語られる。物語の締めくくりとなる第三章“The Rafts on the River”は再び Dickens によって執筆されており、ここでは川を下った一行が本土から引き返してきた Captain Carton 率いる海兵隊と無事に合流し、Christian George King は銃殺され見せしめに木から吊るされる。海賊たちは討伐され、金銀財宝も無事に取り戻され、Gill はその勇敢な行動を称えられる。

時代設定などは異なるものの、この作品はインド大反乱という同時代の出来事を読者に否応なく想起させる。Dickens 自身も書簡の中で、“I wish to avoid India itself; but I want to shadow out in what I do, the bravery of our ladies in India.” (*Letters* 469)と、インド大反乱でイギリス人女性が見せた勇敢な行動を描くことを執筆の意図として挙げている。このような事情もあってか、作品はインド大反乱との関連において論じられることがほとんどで、加えてメロドラマ的な筋書きや安易なプロット展開、原住民の露骨に差別的な描かれ方も相まって、作品そのものの評価は芳しくない。<sup>2</sup> しかしながら、語り手である無学の兵卒 Gill Davis に着目し、労働者階級と帝国の複雑な関係を読み解いた Lillian Nayder の論考を皮切りに、近年では本作は差別主義者 Dickens という従来の一面的な図式だけでは必ずしも回収しきれない奥行きをもったテキストとして新たな興味の対象となっている。本稿ではまず語り手 Gill Davis の階級をめぐる不満が彼の語りに見られるレイシスト的言説とどのように結びついているかを検証し、さらに彼の抑圧された欲望

が本作の特異な語りの構造とも密接にかかわっている点を明らかにし、これまで注目されてこなかったこの作品の意義を再検討したい。

## 1. 差別的言説の正当化

第一章は西暦 1744 年、Gill が南アメリカのモスキート海岸沖で武装縦帆船「クリストファー・コロンブス号」の舷牆に寄りかかって立つ場面の回想から始まる。自らの名前の後に署名代わりに“His Mark” (“Perils” 1)と記していることから明らかのように、彼は読み書きのできない人物として設定されている。そのため物語は彼の語った言葉を“My lady” (“Perils” 1)と呼ばれる女性が一言一句違えずに書きとるという体裁を取っている。

She won't scratch it out, and quite honorable; because we have made an understanding that everything is to be taken down, and that nothing that is once taken down shall be scratched out. I have the great misfortune not to be able to read and write, and I am speaking my true and faithful account of those Adventures, and my lady is writing it, word for word. (“Perils” 1)

この少し変わった語りの形式の特殊性については後に考察するが、Gill のような無学の人物が物語の中心に据えられることはどのような意味を持つのだろうか。まず注意すべきは、すでにみたような Dickens の差別的言説が、自ら教育のないことを認める「粗野な」語り手の声を装うことで他のどの作品にもましてあからさまで直截的な形で述べられている点だろう。例えば、Silver-Store 島に近づいたクリストファー・コロンブス号の水先案内に現れた黒人とインディオの混血の原住民 Christian George King に対して Gill は本能的な反感を覚え、“I have stated myself to be a man of no learning, and, if I entertain prejudices, I hope allowance may be made. I will now confess to one. It may be a right one or it may be a wrong one; but, I never did like Natives, except in the form of oysters.” (“Perils” 4)と述べる。他の個所でも Gill は一貫して、片言の英語を話しイギリス人に卑屈に取り入ろうとする Christian George King に対する強烈な嫌悪感を隠そうとしない。

He was called Christian George King, and was fonder of all hands than anybody else was. Now, I confess, for myself, that on that first day, if I had been captain of the Christopher Columbus, instead of private in the Royal Marines, I should have kicked Christian George King—who was no more a Christian, than he was a King, or a George—over the side, without exactly knowing why, except that it was the right thing to do. (“Perils” 2, 下線は筆者による)

Christian George King を“kick”してやりたいという Gill の暴力的衝動はその後も繰り返される。クリストファー・コロンブス号に生じた原因不明の水漏れ—後に海賊と共謀した

原住民の自作自演であったことが判明する—を知らせに来た時も、Gill は大げさにのた打ち回って「イギリス式」に泣いて見せる Christian George King に対して“kick”したいという気持ちをやっとのことで押しとどめる。

“Oh Christian George King sar berry sorry!” says that Sambo vagabond, then. “Christian George King cry, English fashion!” His English fashion of crying was to screw his black knuckles into his eyes, howl like a dog, and roll himself on his back on the sand. It was trying not to kick him, but I gave Charker the word, “Double-quick, Harry!” and we got down to the water’s edge, and got on board the sloop. (“Perils” 4, 下線は筆者による)

作中で英雄的に描かれる将校の Captain Carton も、敵に慈悲深く対処することを要求する弁務官の Pordage に対して敢然と次のように言い放つ。

“It matters very little, Mr. Pordage, whether or no. Believing that I hold my commission by the allowance of God, and not that I have received it direct from the Devil, I shall certainly use it, with all avoidance of unnecessary suffering and with all merciful swiftness of execution, to exterminate these people from the face of the earth. [ . . . ]” (“Perils” 8, 下線部は筆者による)

この台詞に見られる“exterminate”以下の部分は、明らかにすでに挙げた Dickens 自身がインド大反乱について自身の意見を綴った 1857 年の書簡の文言と呼応している。帝国を脅かす「他者」は速やかに抹殺せねばならず、いかなる慈悲も無用であるとする Dickens の立場を代弁するこの士官の台詞は称揚すべきものとして描かれ、そのため彼と意見を同じくする Gill の差別的言説も、無知ゆえの偏見ではなく、むしろ真実を見抜く洞察としてその正当性が立証される形になるのだ。

## 2. 語り手の抑圧された暴力性

次に主人公の原住民に対する暴力的衝動をさらに細かく検討し、その差別的言説の根底には語り手の階級をめぐる不満が密接に関わっていることを明らかにしたい。

原住民 Christian George King への彼の発言にあった“kick”という語に再度目を向けると、Gill が自らの境遇について語る箇所の中で同じ語句が彼自身が受けた暴力を表わす言葉としてそのまま用いられていることが分かる。すでに引用したように Gill は Christian George King を一目見て蹴り飛ばしたい衝動に駆られたことを告白するが、そのすぐ後でその時の自分は植民地で安楽な暮らしを送るイギリス人たちと我が身を引き比べ、機嫌を悪くしていたことを明かす。

But, I must likewise confess, that I was not in a particularly pleasant humor, when I stood under arms that morning, aboard the Christopher Columbus in the harbor of the Island of Silver-Store. I had had a hard life, and the life of the English on the Island seemed too easy and too gay to please me. “Here you are,” I thought to myself, “good scholars and good livers; able to read what you like, able to write what you like, able to eat and drink what you like, and spend what you like, and do what you like; and much *you* care for a poor, ignorant Private in the Royal Marines! Yet it’s hard, too, I think, that you should have all the halfpence, and I all the kicks; you all the smooth, and I all the rough; you all the oil, and I all the vinegar.” (“Perils” 2-3, 下線部は筆者による)

ここで彼は植民地の裕福なイギリス人が得る“all the halfpence”と対比させる形で、自分のような貧しい一兵卒がもらうのは“all the kicks”ばかりであると述べている。ここから、自らの境遇や階級をめぐる不満が引き金となって、原住民という「他者」への暴力的衝動が Gill の中に生み出されていることが伺える。そして同時に浮かび上がってくるのは、自身の受けた暴力が他者に対しても加えられることを願う Gill の抑圧された欲望である。

作中で Gill が敵意を表明する相手は原住民だけではない。労働者階級としての Gill の鬱屈した怒りはしばしば上位の階級に属する同じイギリス人に対しても向けられる。その暴力的衝動を引き起こす原因は、身分の違う女性への報われない愛である。Silver-Store 島に上陸した Gill は現地で暮らす女性で、クリストファー・コロンブス号の艦長の妹である Marion に惹かれるが、学のない一兵卒に過ぎない自分が裕福な彼女と結ばれることなどありえないと痛感している。Gill は彼女に恋人がいるに違いないと想像し、“(“*He is among one of those parties,*” I thought, “and I wish somebody would knock his head off.”)” (“Perils” 3, 下線部は筆者による)と、その人物に対して自らのやり場のない不満を向けるが、ここで再び Gill の秘められた攻撃性が顔を覗かせている。彼は自分より恵まれた状況にある男に身体的暴力が加えられることを望んでいるが、興味深いのはここで用いられている“knock”という語もやはり作中の前の箇所では Gill 自身が置かれてきた過酷な境遇を表わす語として使われているという点である。

I was thinking of the shepherd (my father, I wonder?) on the hill-sides by Snorridge Bottom, with a long staff, and with a rough white coat in all weathers all the year round, who used to let me lie in a corner of his hut by night, and who used to let me go about with him and his sheep by day when I could get nothing else to do, and who used to give me so little of his victuals and so much of his staff, that I ran away from him—which was what he wanted all along, I expect—to be knocked about the world in preference to Snorridge Bottom. I had been knocked about the world for nine-and-twenty years in all, when I stood looking along those bright blue South American Waters. (“Perils” 1, 下線部は筆者による)

このように Gill は父親代わりとおぼしき羊飼いに小突き回され、それに耐えかねて逃げ

出した後も兵卒として世の荒波に揉まれてきたという。“I had been knocked about the world”という表現には「放浪する」の含意もあるだろうが、受け身で使われている以上、ここでの“knock about”は身体的暴力と結びつく「手荒く扱う」「虐待する」の意味で解釈するのが妥当であるように思われる。こうしたことから、植民地の恵まれたイギリス人男性に向けられた“I wish somebody would knock his head off”という願望の背後には、Gill 自身が受けてきた苦痛が暗示されており、同時にそれを他者に対しても向けたがる傾向が彼に潜んでいることがまたしても読み取れる。

しかしながら、Gill が階級に対して抱く抑圧された不満は表面上は顕在化することはない。植民地におけるイギリス人コミュニティの秩序の転覆は実際には Gill ら労働者階級のイギリス人ではなく、Christian George King をはじめとする原住民と、彼らと結託した海賊たちによって試みられる。この意味で、帝国に反旗を翻す彼らの襲撃は、Gill の潜在的な欲望を彼に代わって実行しているものであると言えるだろう。Nayder は“The pirate attack serves as a substitute for the “mutiny” threatened by Davis and his sense of class injury” (“Class Consciousness” 699)と、Gill ら労働者階級が抱く反逆への願望が海賊の襲撃によって代行されていることを指摘しているが、ここまで検証してきた語り手の抑圧された暴力性の表象は Nayder の議論を確かに裏付けるものだろう。実際、海賊たちは“The worst men in the world picked out from the worst” (“Perils” 33)とされるように、Gill と同じ下層階級の間人たちが構成されており、Dickens は本作の悪役を設定するにあたって明らかに階級の枠組みを軸として用いている(加藤 93)。それに加えて、“there is no such Christian-name as Gill” (“Perils” 163)とおよそキリスト教徒らしからぬ洗礼名を持ちながら、植民地の危機に際して誰よりも勇敢でキリスト教徒らしい振る舞いをみせる Gill と、その名前とは裏腹に“no more a Christian, than he was a King, or a George” (“Perils” 2)であることが暴かれる Christian George King もまた、互いを写しあう鏡像のような関係にある。<sup>3</sup>Gill は“I had a thundering good mind to let fly at him with my right” (“Perils” 4)と、別の箇所でもこの人物に暴力的衝動を覚えているが、海賊の襲撃時に Christian George King はそんな Gill の内心を見透かしているかのように彼の“right leg” (“Perils” 13)にしがみついて彼を捕虜にしている。Nayder が“The exposure of the native as a false Englishman establishes the private as a true one” (“Class Consciousness” 700)と述べるように、

Gill は自らの分身でもある Christian George King の虚偽性を暴き、「真の」イギリス人として戦い彼を処刑する過程を経て、帝国の一員としてのアイデンティティを確立することが可能になるのである。植民地での反乱の鎮圧を通じて Gill の反逆への欲望と階級への不満は解消され、物語の最後には“I was long in the service, and I respected it, and was respected in it, and the service is dear to me at this present hour.” (“Perils” 36)と、一兵卒でありながら帝国に奉仕し続けた自己を肯定するに至る。この結末からは、植民地や外国に対する暴力を、「公務執行型の正義の暴力」(松岡 16)として許容する論理が見て取れる。Dickens が帝国主義を“ideological safety valve” (Nayder, “Class Consciousness” 692)として機能させていると指摘される所以である。

### 3. 語り手の抑圧された性的な欲望

Gill の活躍もあり Silver-Store 島の秩序は回復されるが、物語はそこでは終わらず、“I come to the last singular confession I have got to make” (“Perils” 36)と、Gill のその後の人生が明かされる。Gill は Marion から厚く感謝されるが、身分の隔たりもあって二人が結ばれることはない。彼は軍隊での勤務を続けるが、結局克服することのできなかつた自身の無学ゆえに昇進することもなかった。だが物語の最後で、出世し総督・准男爵となった Carton と結婚した令夫人 Marion が、遠い異国の地で傷を負い病院に収容されていた Gill を探し出して彼女の屋敷に引き取り、彼女こそが彼の物語を記述する“my Lady”であったことが明かされる。

At this present hour, when I give this out to my Lady to be written down, all my old pain has softened away, and I am as happy as a man can be, at this present fine old country-house of Admiral Sir George Carton, Baronet. It was my Lady Carton who herself sought me out, over a great many miles of the wide world, and found me in Hospital wounded, and brought me here. It is my Lady Carton who writes down my words. My Lady was Miss Maryon. And now, that I conclude what I had to tell, I see my Lady's honored gray hair droop over her face, as she leans a little lower at her desk; and I fervently thank her for being so tender as I see she is, towards the past pain and trouble of her poor, old, faithful, humble soldier. (“Perils” 36)

自身の物語を Marion に語り、それを書き取ってもらうことで Gill の抱えていた傷は癒され、この作品は少なくとも表面上は幸福な結末を迎える。しかしながら、Marion との厳然たる身分の隔たりを認識しつつ自らの現状を肯定し、帝国への奉仕に生きがいを見

出す Gill の深層には、すでに見てきたように、帝国の外側の「他者」に向けられることで辛うじて封じ込められている労働者階級の抑圧された暴力的衝動が潜んでいる。その意味で作品結末部で提示される理想的かつ楽観的なビジョンには、帝国を内部から突き崩しかねない「危機」が依然として内包されているのではないだろうか。

そして物語の特殊な語りの構造そのものが、そうした潜在的な危うさをいっそう浮き彫りにする。すでに見てきたように、この作品は読み書きのできない Gill が語った内容を Marion が忠実に書き記すという形式となっている。確かに、ここから Nayder のように二つの階級が融和する“the social harmonies of an idyllic, precapitalist world” (“Class Consciousness” 702)を読み取ることも可能だろう。しかしながら、Collins が執筆した第二章を視野に入れて作中における「書く」行為の描かれ方に着目すると、Gill と Marion の共同作業によって語られるこの物語の構造そのものの中に内在する Gill の抑圧されたもう一つの願望である、上位の階級である Marion に対する性的な欲望が、すなわちイギリス国内の社会秩序を攪乱しうる行為への潜在的な願望が露わになるようにも思われる。<sup>4</sup>

第二章“The Prison in the Woods”は、捕虜になった Gill や Marion らイギリス人が集められ、彼らの前で海賊の首領(the Pirate Captain)が海兵隊への要求を紙に書きつける場面から始まる。いささか奇妙なことに、首領はここで黒人の男を呼び出し、その背中を机代わりにして文字を書きはじめる。

“Something to write on,” says the Pirate Captain. “What? Ha! why not a broad nigger back?”

He pointed with the end of his cigar one of the Sambos. The man was pulled forward, and set down on his knees with his shoulders rounded. The Pirate Captain laid the paper on them, and took a dip of ink—then suddenly turned up his snub-nose with a look of disgust, and, removing the paper again, took from his pocket a fine cambric handkerchief edged with lace, smelt at the scent on it, and afterwards laid it delicately over the Sambo’s shoulders.

“A table of black man’s back, with the sun on it, close under my nose—ah, Giant-Georgy, pah! pah!” says the Pirate Captain, putting the paper on the handkerchief, with another grimace expressive of great disgust. (“Perils” 14)

ここでは明白に「書く」側の人間とそれに従属する「書かれる」側の人間との間に濃厚な身体的接触が存在しており、Garrett Ziegler もこの場面に“sodomy” (160)を見出し、海賊たちの同性愛的傾向を読み取っている。

さらに興味深いのは、これに続いてほぼ同一の構図が Gill と Marion との間で繰り返



される点である。首領の記した脅迫状への署名を迫られた Marion は Gill の胸で紙を押しつけて文字を書きつける。

“Whether I sign, or whether I do not sign,” she said, “we are still in the hands of God, and the future which His wisdom has appointed will not the less surely come.”

With those words she placed the paper on my breast, signed it, and handed it back to the Pirate Captain.

“This our secret, Davis,” she whispered. “Let us keep the dreadful knowledge of it to ourselves as long as we can.”

I have another singular confession to make—I hardly expect anybody to believe me when I mention the circumstance—but it is not the less the plain truth that, even in the midst of that frightful situation, I felt, for a few moments, a sensation of happiness while Miss Maryon’s hand was holding the paper on my breast, and while her lips were telling me that there was a secret between us which we were to keep together. (“Perils” 16)

海賊に捕えられた危機的な状況にもかかわらず Gill はここで“a sensation of happiness”を感じたことを告白する。Tickell が“Here again eroticizing connection of writer and written-upon is unmistakable” (479)と断定するように、またしても書く者と書かれる者の間の性的な結びつきが示唆され、Gill が Marion に抱く欲望が見え隠れする。

このように、Collins が執拗なまでに共同でなされる書記行為があたかも性的な交わり  
の隠喩であるかのように提示するために、Gill の言葉を Marion が書きとめるという  
Dickens が設定した作品の枠組みそのものが、二人の関係の過度の親密性を連想させる  
ことになりはしないだろうか。細かい状況こそ違えど、Marion に自らの物語を記しても  
らうことで“I am as happy as a man can be” (“Perils” 36)と、Gill が言いしれぬ幸福感を味  
わう箇所は、彼女が Gill の胸に紙を押し付けて文字を書いた時に感じた“a sensation of  
happiness” (“Perils” 16)と呼応しているように思われる。もちろん、この語りの形式が性  
的な結びつきを暗示するとしても、それは実際の不貞行為ではなく、あくまでも Gill の  
側に潜む語られざる欲望に過ぎない。<sup>5</sup> その暴力的衝動と同様に、Gill が Marion に対し  
て抱く欲望もまた深く抑圧されつつ、自身の内奥でくすぶり続けるのである。

## まとめ

以上見てきたように、“The Perils of Certain English Prisoners”で表象される原住民への  
差別的言説や帝国主義的イデオロギーの背後には、労働者階級である語り手の抑圧され  
た暴力的欲求が隠されている。彼が上層の階級のイギリス人男性に対して覚える暴力的

衝動は植民地に向けられることでいわば「毒抜き」され、帝国の一部へと取りこまれる。さらに、物語の特異な語りの構造は、Gill が階級への不満を募らせる原因である、上位の階層に位置するイギリス人女性に抱く性的な欲望の存在をも示唆する。暴力的衝動も性的欲望もイギリス国内の階級の境界を侵犯する願望の表れに他ならないが、その意味で帝国は植民地という得体の知れない「他者」の跋扈する外縁部のみならず、その内部からも社会秩序を破壊される危険性を宿しているのだ。この作品から浮かび上がってくるのは、Gill に代表されるようなイギリス国内の虐げられた者、不満を抱く者たちの欲望を抑圧することで辛うじて均衡を保つ帝国の危うさであると言えるのではないだろうか。

## 注

<sup>1</sup> Tickell は “his letters to “ABC” [Angela Burdett-Coutts] were often composed with a note of whimsical, flirtatious hyperbole, and the scourging tone of his pronouncements about “the late cruelties” in India may have been partly ironic” (462) と指摘する。Ackroyd はこの手紙に見られる激烈な調子については、“a rage which blended easily with his private discontents” (844) と、当時の Dickens の家庭生活における不満の投影であると述べている。1857 年といえば Dickens は妻 Catherine との関係が破綻しつつあり、18 歳の女優 Ellen Ternan に強く惹かれていた時期である。また、反乱勃発の二か月後に息子のウォルターが士官候補生としてインドに赴任していたという事情も当然影響していたと思われる。

<sup>2</sup> 例えば Brantlinger はこの作品がインド大反乱を扱った最初の作品であるとしながらも、“just as melodramatic as *Jessie Brown* and in some respects even more wildly inaccurate” (207) と評している。

<sup>3</sup> Grace Moore が “conspicuously lacking in any kind of motive whatever” (122) と指摘し、Michael Slater も “apparently motiveless” (441) と述べているように、島の金銀財宝を狙う海賊と異なり、Christian George King にはイギリス人を裏切るこれといった動機が作中では描かれないために、Christian George King が Gill の分身であるという論はいっそう説得力を持つ。Jeremy Tambling も、“In this text, Christian George King, like Uriah Heep in relation to David Copperfield, is set up as a double of Davis” (191) と主張している。

<sup>4</sup> Dickens と Collins のパートナー関係については、Lillian Nayder, *Unequal Partners: Charles Dickens, Wilkie Collins, & Victorian Authorship* で詳細に論じられている。他にも Alex Tickell や Garrett Ziegler が “The Perils of Certain English Prisoners” において Collins と Dickens のテキストが微妙な緊張関係を孕んでおり、とりわけ Dickens の執筆箇所に顕著に見られる人種差別主義的・帝国主義的なイデオロギーに対して、Collins の手による第二章は様々な形で疑義を呈し、それらを打ち消す方向に作用していることを明らかにしている。

<sup>5</sup> “The Perils of Certain English Prisoners” の二年後に執筆され、同じく三角関係を扱った *A Tale of Two Cities* (1859) と同様に、この作品における Gill、Captain Carton、Marion の関係には Ellen Ternan との情事をめぐる Dickens の実生活における状況が投影されているかもしれない。

## 引用文献

- Ackroyd, Peter. *Dickens*. Minerva, 1991.
- Brantlinger, Patrick. *Rule of Darkness : British Literature and Imperialism, 1830-1914*. Cornell UP, 1988.
- Dickens, Charles. *The Letters of Charles Dickens*. Edited by Graham Storey, Kathleen Tilotson and Nina Burgis, the Pilgrim Edition, vol. 8: 1856-1858, Clarendon P, 1995.
- . "The Noble Savage." *The Uncommercial Traveler and Reprinted Pieces, etc.* Oxford UP, 1958, pp. 463-473.
- Dickens, Charles and Wilkie Collins. "The Perils of Certain English Prisoners." *Household Words*. Extra Christmas Number, December 1857, pp. 1-36.
- Moore, Grace. *Dickens and Empire: Discourses of Class, Race and Colonialism in the Works of Charles Dickens*. Ashgate, 2004.
- Nayder, Lillian. "Class Consciousness and the Indian Mutiny in Dickens's 'The Perils of Certain English Prisoners.'" *Studies in English Literature, 1500-1900*, vol. 32, no. 4, 1992, pp. 689-705.
- . *Unequal Partners: Charles Dickens, Wilkie Collins, and Victorian Authorship*. Cornell UP, 2002.
- Slater, Michael. *Charles Dickens*. Yale UP, 2009.
- Tambling, Jeremy. *Dickens, Violence and the Modern State: Dreams of the Scaffold*. St. Martin's P, 1995.
- Tickell, Alex. "The Perils of Certain English Prisoners: Charles Dickens, Wilkie Collins, and the Limits of Colonial Government." *Nineteenth-Century Literature*, vol. 67, no. 4, 2013, pp. 457-489.
- Ziegler, Garrett. "The Perils of Empire: Dickens, Collins and the Indian Mutiny." *Pirates and Mutineers of the Nineteenth Century: Swashbucklers and Swindlers*. Edited by Grace Moore, Ashgate, 2011, pp. 149-164.
- 加藤匠「現実と虚構の狭間で—ディケンズとセポイ反乱」『桐朋学園大学研究紀要』 31, 2005, pp. 81-103.
- 松岡光治「序章 抑圧された暴力のゆくえ」『ディケンズ文学における暴力とその変奏』松岡光治編, 大阪教育図書, 2012, pp. 1-20.